

---

# 野生と生きた 88年

高橋 清 (29C 応化)

---



赤城山

## その2：大学を卒業する

子どもの頃を振り返ると、小学2年生頃、お腹を空かして学校から帰って



すぐ、氷の入った冷蔵庫を開けた。そこには買ったばかりと思われる卵が10個入った箱が冷えていた。その卵が父の製造する和菓子用だった事も知らず、「一度に幾つ食べられるか。」、と思って8個を食べてお腹一杯となり、あと2つがどうしても食べられないことを大の字になって悔やんだ。沢山の殻を見た母が気付いて大騒ぎとなり、母は僕のお腹をポンと叩いてから、卵を買うために近所の養鶏場に走り出ていった。父にはいつもの通り、「その好奇心を、もっと大事なところに生かせ」とだけ言われた。

後に大学で応用化学を学び始めて、いつも新しいお菓子を作る努力をする父の和菓子職人の根底には一つの化学の応用があることに気付いたが、僕の好奇心は、父の新製品の試作を見て育まれたようだ。父も、興味を示す僕に何時も試食をさせてくれた。そして家に居る時は益々父の仕事の手

伝いが面白くなって、良く”化学を考えながら”父の手伝いをした後、「味の確認」と称して堂々と、出来立てのお菓子をつまみ食いた。このおかげで今の齢になって元の形で残っている歯は2、3本しか無い。

さて、その学生時代、時には勉強よりも心を奪われたのは山岳部活動、年末から年始にかけての仙之倉山荘合宿はその年のハイライトだ。

雪の深い山荘で一番の楽しみの夕食はよく造ったが、卒業真近の合宿には家から麵棒を持参して、山行から早く帰った日を選んで、うどんを打って上州の「煮込みうどん」を作った。凸凹だらけのテーブルの上で、12人分のうどんを打つのは大仕事だった。



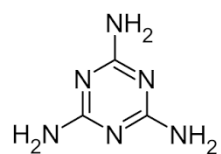
昭和45年大修理のころの仙之倉山荘

その日の山行で汗まみれの靴下や手拭い、帽子などが、小屋の暖房と唯一の炊事の火元である、ストーブの上に取り付けられた金網の上に乗るが、その日は乗せきれなくて網の下にも沢山の靴下が針金にぶら下がっていた。蠟燭の光を頼りに、そのストーブの上で大きい鉄鍋を使っただけの料理、辺りが真っ暗になる頃に出来上がった煮込みうどんをどんぶりに盛り始めると、大きな塊がしゃもじに掛かった。摘み上げるとそれはすっかり煮込まれた片方の靴下。それを見ていた仲間が、「アアア。。。」と失望の大声を上げると、ストーブわきに座っておられた物理の忍足先生が、慌てるな、と言ったお顔で「早く盛ってくれ」とご自分のどんぶりを差し出した。「よく煮て消毒済みだ」。それを見た一同は、全てを忘れて熱い煮込みうどんを忽ち食べ切った。幸い汗の臭いは誰も感ずることは無かった。

「好奇心」は何時も僕の心を駆り立て、今も生きている。卒業前の就職活動で、僕は合成樹脂に強い興味を持ち、アメリカの企業と大日本インキ製造（株）との合弁会



社の事を知り、「面白そう」と詳しく調べもせずその会社を受験した。筆記試験で、今も記憶に残るのが当時合成樹脂原料の一つとして知られ始めていた或る構造式が示され、化学品名を求める項があった、その六角形の構造式を見たのは初めてだったが、その構造から名を選んで、tricyanotriamine と誤回答をした。その物質は、その後、入社直後の1年の仕事の5割近くを占めた原材料になったメラミン。入社後、当時の入社試験問題の作成と採点をした人に会う機会があって、僕の間違いは



メラミン化学式

「間違いなるも正答への努力を感じた」と言ってもらえたものである。

こうして入った大学生活は、新しい学問を学び、学習に更に熱中した仲間との交流、そして山岳部の未知の分野での仲間との共同生活、今思い返しても全ての環境にまっしぐらに熱中出来た時期であった。何にも頭角の表せなかった僕ではあったが、今まで全ての人生の助けになる人生を学べた時であった。



同窓記念会館移転前の学舎  
(昭和31年ころ)

ほとんど毎日の新発見、学習、そして親密にして学術的な交友の中で、あっという間に4年が過ぎ、僕は未だ登り足りなかった山登りの最後を飾ろうと、3月末に、北アルプスの五竜岳の登山を山登りの先輩と共に計画した。第一夜を無人の山小屋で過ごして、朝、眼が覚めると豪雪に見舞われ、吹雪の中を登頂を目指したが、状況は悪化、途中で道を失い、新雪の中をさまよう事になった。当時既に二人ともかなりの登山の経験があり、地形から道を推定することは慣れていたにもかかわらず、吹雪と深い霧のため視界を遮られ、気付くと暫く前に歩いた地点に戻っている、と言ういわゆる「リングワンデリング」（環形彷徨とも言い、方向性を失って同じコースをさ迷い歩く現象）を生まれて初めて体験した。二人は身の危険を感じて、心を落ち着かせるために大木の根元に穴を掘って潜り込み、手持ちのおにぎりを食べて気を静め、暗闇の訪れる前によく前夜に泊まった山小屋に戻れた。翌日、予定より一日遅れて帰路につき、帰宅した途端、生まれて初めて、父から殴られるかと思う程の叱りを受けた。母が心配して夜も眠れず、この日に帰宅しなかったら警察に捜索依頼の予定であったらしい。その日、つまり実際に帰宅した日には、大学で卒業記念の写真撮影があったが、撮影に参加出来なかった。僕の姿は卒業生の写真には無い。それでも何とか卒業式に出席出来た事は幸이었다。

こうして問題の残る卒業をしたが、やがて、前述の誤回答があったにかかわらず、

たった一度の受験で目的の会社に就職が決まった。いよいよ東京に出発、母は見送りが辛く、出て来なかったが、今までどこに行くにも決して見送りをしてくれなかった父が何も言わずに家の前に立った。ごく軽く挨拶をして駅まで約200メートルの道を歩きながら時々振り返ると、手も振らずじっとこちらを見ている父は、僕が駅の方に曲がるまでそこに居た。きっと、12歳上の兄と一緒に僕に家業を継がせたかったのか、僕はどうしたらよいか、初めて自分の判断に迷った記憶は、父が他界した今も心に残っている。（続く）



故郷みどり市大間々町早川貯水池からの展望

前記、「野生と生きた88年、その1」において、大きな間違いを犯しました。お詫びとともに訂正します。

2ページの下部、大学の社会科の講義に関わる事件で、「子無きは去る」の講義を頂いたのは「尾関教授」、肝心の友人の言葉を完全に間違えて紹介しましたが、実は友人は「去る」を「猿」と聞き違へ、「子が無いと何で猿になるんだ」と言ったのです。それで僕は前後を忘れて大声を出してしまった、と言うわけです。ここに来て、歳による物忘れを暴露しました。

(高橋)